

〈調査報告〉

## 保育内容「身体表現」の研究Ⅱ

——動きを引き出す言葉かけから  
「しーん」の動きイメージを探る——

平野 仁 美

### 1. はじめに

子どもが自己イメージを自分の身体を動かしてあらわすとき、保育者がどんな言葉かけをするかで、動きのイメージは、膨らんだり、豊かになったりし、子どもは動きを工夫して保育者にもどしてくると考えられる。身体表現を楽しみ、自己の身体能力を十分発揮させて動き、あらわし方を深めてゆく時に、子どもの言葉認知やイメージ理解、さらには、心の育ちや身体機能の発達をも考慮した保育者の言葉かけが十分されていないと、動く楽しさが半減したり、自ら工夫して動こうとしなくなったりすることがあるとも考えられる。

筆者は、2008年保育学会第61回大会<sup>(1)</sup>において、現役保育者と学生から身体表現の保育を展開する時の言葉かけを質問紙により集め、子どもから楽しくかつ題材の特徴をとらえた動きを引き出すために、どんな言葉かけがされているのかを4つのカテゴリー<sup>(2)</sup>に分け言葉かけの種類・傾向などの特徴を探り発表した。その研究経過の中で、保育者が動きを引き出す際に子どもに多くの擬音・擬態語（以後、オノマトペという）を使っている点に注目した。

本研究は、子どもから動きを引き出す環境として使用した絵本『もこもこ

もこ』<sup>(3)</sup>の、冒頭に出てくる「しーん」という言葉を投げかけた時、子どもがどのような反応を示して動きをあらわしたのかに注目し、動きイメージの工夫から子どもが言葉を受け止めて動きをあらわすイメージを探ることを目的とする。

## 2. 身体表現の保育について

子どもは、心身の成長とともに様々な能力を発揮していく。その一部に、言葉や記憶や概念を獲得し、子どもなりにイメージをわかせる前にないものを思い浮かべることができるようになる。そのことから、からだところを柔軟にして動きと絡み合わせ自己の思いをあらわしたり、送ったりしながら表情の豊かさや動ける喜びが味わえるようになることが考えられる。筆者は、このような点に着目し、永年「身体表現遊び」の保育を実践し検討・考察をしてきた。

子どもが暮らす園という集団の間では、保育者によって様々な遊びが提供されている。身体表現の保育実践も領域「表現」<sup>(4)</sup>として幼稚園や保育所の教育内容の位置付で展開されている一つの遊びである。

遊びは、子どもが自ら生みだすものと、保育者によって提供されるものがあると考えられる。保育者が遊びを提供する意図の向こうに、遊びを通して、子どもたちの発達する姿があることが考えられる。また、遊びを通して、子どもの脳を刺激し、イメージや体験の記憶を自己の身体機能を使って楽しむ遊びへと誘うことは、自己実現、創意工夫後の爽快感を味わいながら育つことができると考えられる。

身体表現の保育実践は、身体の揺り動かし、仲間からの刺激が自己の力を倍増させ、さまざまな機能を高めていくのであると考える。そして、おおむね何歳の育ち<sup>(5)</sup>の幅が十分受容され、自己肯定感を育てる遊びであると考えられる。

### 3. オノマトペについて

インターネットでオノマトペ<sup>(6)</sup>について検索すると「オノマトペとは、「ドキドキ」、「ざわざわ」、「チクタク」のように物が発する音や声を言葉で表した時の擬音語、「キラキラ★」、「もふもふ」、「くよくよ」のように状態や感情等の音を発しないものを感覚的に言い表す時に使用される擬態語の両者の総称である」と述べられている。(dic.nicovideo.jpニコニコ百科2014/10)他に、広辞苑その他の国語辞書においても同じような意味があげられているため、本論は上記を参考としオノマトペを理解しておく。

また、身体表現の保育実践と結びつけるためには、田守育啓著『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』（2002年岩波）を参照した。この本のまえがきにおいて、「オノマトペは、基本的にその音の響きから得られる意味を表すので、感覚的な言葉であるが、一般語彙よりも生き生きとした臨場感に溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にすることから、日本語には不可欠な言語要素である」と述べられている。さらに、「オノマトペは、基本的に言語音を利用して、現実の音・声・動作などを模倣してつくられたことばなので、普通の言葉と違い、オノマトペに含まれている音と意味の関係はより密接である」とも述べられている。

上記内容を意識すると、身体表現遊びにオノマトペを用いることで子どもから動きを引き出し易くなると考えられる。

#### (1) オノマトペを意識的に使った身体表現について

項目3. オノマトペについての内容を意識して、身体表現の遊び展開中に保育者が使う言葉かけを見ていくと、多くのオノマトペが使用されていることに気づく。そして、身体表現の保育実践DVD記録を繰り返しみて検証していくと、保育者は動きを引き出す時に良く使っていることがわかった。例えば、「ゾウになって歩くよ・・・ノッシ、ノッシ」とか「ゾウは、鼻が

ながいね・・・ブラーン、ブラーン」「カエルが草むらから広場に遊びに来たよ・・・ピョンピョン」といったように保育者は使っている。子どもは「ゾウ」、「カエル」の名称後に付け足されたオノマトペによって、より一層そのものの特徴をイメージして身体を動かしやすい状況が現れていることがわかる。（下線は、筆者がオノマトペを強調するために付した。）

オノマトペを意識的に使った身体表現の効果を探る際に、今回検証の視点として挙げた4歳児、5歳児の発達を見ていくと、言葉が巧みに使えるようになり、言葉からイメージをわかせる、自己の身体を思う存分使って、投げかけられた題材を表現しようとするようになってきている姿が確認できる。従って、この時期の子どもたちは旺盛な好奇や意欲、思考力や認識力が高まってきていると考えられる。また、自然事象や社会事象への興味関心が深まり、題材を意識してイメージを湧かせることができるようになってきており、オノマトペをシャワーのように的確に浴びせかけることにより、遊びの楽しさをより実感できる年齢であると考えられる。

さらに、見たこともないものや感覚的に知っているもの、形に表すのが難しいものでも、自分なりに工夫して表すことができるようになってきているのである。対象児は、子どもだからこそその感覚を持っていて、大人では表せないようなものでも、さらっと難なく、あらわしてしまうこともあり保育中にとっても感動したり、驚かされたりする場面にたびたび遭遇することがあった。柔軟な頭、心から子どもならではの面白い動きを発見するのもこの時期の子どもの特徴であるようだ。

そこで、子どものこんな面を身体表現の遊びにしてみたのが、オノマトペを用いた動きの表現であるのだと考えられる。

## （2）分類されたカテゴリーからみられるオノマトペを使った身体表現保育の傾向

筆者は、2008年の研究において、言葉かけの傾向を動きから検証した結

果、子どもが動きをあらわす時オノマトペは非常に効果があることがわかった。この研究では、保育者がよく題材にする「蝶々」、「カエル」、「たまご」の3つをあげ、舞踊の4要素のカテゴリーから動きを引き出す言葉かけを探った。

その結果、題材によってかける言葉の違いはあるものの表1が示すように、跳ねたり、転がったりする動きがある題材には、オノマトペや動きの言葉かけが多くされることを報告している。また、空間の言葉は、他の言葉より言葉かけ数が少ないが、「蝶々」のように、優雅なゆったりした動きを引き出すときは、空間の言葉かけも保育者は、使うことがあることをアンケート結果から明らかにしている。空間の言葉数が少ない理由として、子どもたちに具体的な動きをイメージし、題材の持つ特徴を身体であらわして欲しいと願っているから、丁寧な言葉を選んでかけているのだと考えられる。

その反面オノマトペには、簡単・面白い・感覚的・リズムがとりやすい・なりきりやすい雰囲気・気持ちの切り替えがしやすいなどのように、他の言葉では代えがたい動きを引き出す要素が詰まっているので、よく使うのだと推察する。

2008年の研究対象は、子どもから動きを引き出す側として学生と保育者とした。その中で見られた言葉かけの特徴として、学生は、題材の要素を言葉かけるとき、保育者と比べるとオノマトペを多く用いた言葉かけをしていた。保育者は、分類されたカテゴリーの言葉をだいたい平均的に言葉かけしている。しかし、両者共に動きを引き出す時、オノマトペを多く用いているという結果が出ている。

オノマトペを投げかけることで、保育者はくどくどと動きを引き出すための言葉をかけ過ぎないで済み、学生はリズムカルに繰り返しオノマトペを使うことで、子どもの動きをみる余裕が持てるようになってくることがわかった。両者は、オノマトペの効果を感覚的に感じておりオノマトペには自然に身も心も軽くなり、動きたくなる要素があることを実感しているようだ。筆

者が、2008年保育学会第61回大会において、「身体表現の動きを引き出す言葉かけ—保育者と学生の言葉かけアンケートからの一考察—」と題して、アンケートの回答を4つのカテゴリーに分け言葉かけの種類・傾向などの特徴を探った質問紙調査により言葉かけ数の分析結果を以下に示しておく。  
(表1)

表1 学生と保育者の言葉かけの分類 (2007年9月～12月末質問紙調査により分析)

言葉分類 表現題材	舞踊の要素から分類した言葉の数と割合				
	言葉分類表	オノマトペ	空間	動き	イメージ
蝶々の言葉 かけ数	学生 N=328	65 (19,8%)	20 (6,1%)	93 (28,4%)	150 (45,7%)
	保育者 N=326	2 (0,6%)	70 (21,5%)	103 (31,6%)	151 (46,3%)
カエル言葉 かけ数	学生 N=330	111 (33,6%)	6 (1,8%)	127 (38,5%)	86 (26,1%)
	保育者 N=356	79 (22,2%)	13 (3,7%)	164 (46,0%)	100 (28,1%)
たまご言葉 かけ数	学生 N=285	100 (35,1%)	8 (2,8%)	71 (24,9%)	106 (37,2%)
	保育者 N=290	42 (14,5%)	16 (5,5%)	97 (33,4%)	135 (46,6%)

上記から、オノマトペが動きを引き出す時保育の場面でよく使われている言葉かけであることが確認できた。

### (3) 今回の研究への流れについて

今まで筆者が継続してきた研究から、身体表現の保育展開を試みる時、保育者がかけている言葉の中でオノマトペの効果をあげてきた。そこで、本研究においても動きを引き出す環境としてオノマトペの構成により、ストーリーが展開されている絵本を使って動きを引き出す保育実践をした。その代表作として、「もこもここ」、「がちゃがちゃどんどん」、「ぷちぷち」、「くりくり」、「ちもちも」をあげることができる。これらの絵本を媒介にして、投げかけられた言葉をイメージして自己の身体機能を使いオノマトペを動きであらわす遊びとして意識的に取り入れたものである。

子どもは、オノマトペに反応して動くことを楽しんだが、絵本「もこもこ」を使って保育する時、最初のページに出てくる「しーん」という言葉を動きに置き換えていく過程に見られる様々なあらわしと、動きを考える時に行った子どもとの話し合い場面から動きを作り出していった子どもの思いを整理することで、「しーん」のあらわし方の違いを探っていくものである。そのことから、動きのスタイルは個々に違っているが、何らかの傾向が発見できることが考えられる。言葉からのイメージを身体であらわし、動きへとつなげながら動き方を考えていく時に子どもがイメージしている思いやイメージを湧かせるもとなった体験なども動きイメージの背景が浮き彫りにされ、子どもがあらわした思いを発見できると考えた。

#### 4. 研究方法

(1) 期間：2010年5月～2014年6月

(2) 対象

- ① 豊川市の保育園15園
- ② 岡崎市の幼稚園3園、保育園5園
- ③ 京都府綾部市の幼児園1園、保育園4園
- ④ 蒲郡市の保育園3園
- ⑤ 名古屋市の保育園2園
- ⑥ 幸田町の保育園1園
- ⑦ 川崎市の保育園1園
- ⑧ 豊田市の幼稚園1園

上記36園(4歳児157人、5歳児1608人)の4歳児～5歳児を対象として、身体表現の保育実践をDVDに録画し、子どもの動きを取り上げ考察する。

(3) 保育実践

絵本『もこもこもこ』の読み聞かせ後、保育者が絵本に載っているオノマトペを投げかける。子どもは、投げかけられたオノマトペをイメージして動きをあらわす。

#### (4) 方法

- ・絵本『もこもこもこ』の冒頭に出てくる「しーん」というオノマトペをどのように受け止め動きをイメージしていくのかを話し合い場面とイメージして動く実践場面から探り、言葉と動きとイメージの関係性を探る。
- ・保育実践は、筆者もしくは担任が身体表現の保育を展開する。
- ・保育展開を実践した内容をDVDに録画し、その場面から子どもの動きを取り上げ、動いた形と動きへの思いを探り考察する。

### 5. 絵本『もこもこもこ』について

『もこもこもこ』の絵本は、各ページの場面ごとにオノマトペが書かれ、それを表す場面画が示されている。

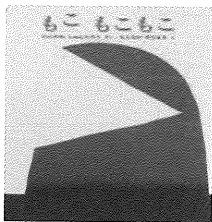


図1 絵本『もこもこもこ』

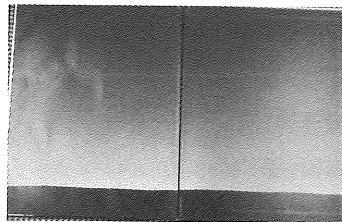


図2 「しーん」の画面分析)

「しーん」
「もこ」
「もこもこ」
「によき」
「もこもこもこ」
「によきによき」
「ぱく」
「もぐもぐ」
「つん」

まず、冒頭のページは「しーん」から始まる。そして、「もこ」⇒「もこもこ」⇒「によき」⇒「もこもこもこ」⇒「によきによき」⇒「ぱく」⇒「もぐもぐ」⇒「つん」⇒「ぽろり」⇒「ぷうっ」⇒「ぎらぎら」⇒「ぱち



ん」⇒「・・・」⇒「ふんわ・ふんわ・ふんわ」⇒「しーん」⇒「もこ」で終了している。なんとも面白い絵本である。

子どもたちは、このオノマトペを動きに変換することからこの保育が展開していくのである。「しーん」の場面は、一面ブルーで空とも海とも感じ取れる。子どもたちの気づきから「しーん」は、静かをあらわし、静かを表す動きが工夫された。

## 6. 絵本『もこもこもこ』から「しーん」の動きイメージを探る

本論は、絵本『もこもこもこ』を題材として、7市1町の幼稚園4園、保育所11園で4歳児157人、5歳児1608人を対象として、身体表現の保育を実施した。保育展開者は、筆者またはその園のクラス担任が行った保育をDVD録画し、「しーん」の動きを取りだし、子どもが「しーん」に対するイメージをどのような気持ちで動きを創り出していったのかを以下にあげる。

(1) 「しーん」に対する5歳児の動きイメージ

<図3からのイメージと考察>

図3：5歳児場面①



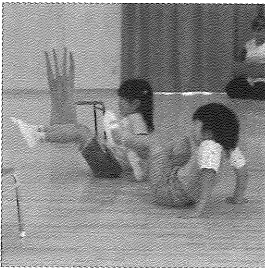
身体を丸めて動きを止める。

静かにしていることは、身体を固く固めて止めている事であり石のようにカチカチで、周りの物を取り込まないという構えである。

頭も床にくっつけていることから、真ん丸に近づきたいという意図が伝わる。

<図4からのイメージと考察>

図4：5歳児場面②



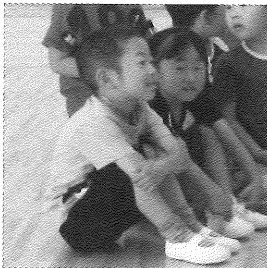
足をあげ両手で体が倒れないようにV字バランスの姿勢で止まる。

バランスを取ることや一定の角度で止めて、静かに待つという動きである。

「しーん」の言葉から、揺れが止まる、ゆらりと動かずピタッと止まって身体の調整を取ることに気持ちが込められている。

<図5からのイメージと考察>

図5：5歳児場目③

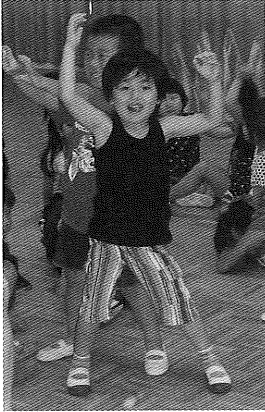


お話を聞く時のお山座りの姿勢をとり動かないようにじっとしている。

「しーん」は、静かに待つというイメージを湧かせた。日常生活の中で静かにしている時、この姿勢を取るということが保育者から要求されることが多いのであることが伺える。身体表現で保育者が期待した動きとは、ずれた気がしたが子どもは、日常要求される動きのようだ。

<図6からのイメージと考察>

図6：5歳児場面④



腕を高くあげた立ち姿であるが、じっとして動きを止めていることで「しーん」を表している。  
立っていても動かず、黙っているというイメージからこの動きを提案してきたことが、動きを止める強固な姿勢をとるという考えを生み出したのである。  
動かないようにしているという思いが前面に出ている。立つということで、自己を「しーん」の中で主張し、自分は、ここにいると他へアピールした、動きの主張とも取れる。

<図7からのイメージと考察>

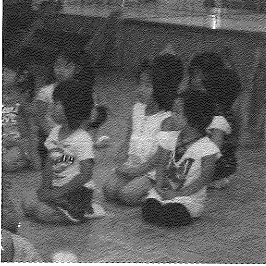
図7：5歳児場面⑤



寝転んでいるが足を上にあげ止めている。  
背中もお尻も床にぴったりくっつけて音を立てないように足をあげたのである。  
バタバタ足を動かさずにじっとしていることで「しーん」を演じようとした。  
足を上にあげることによりインパクトが出たため模倣した子が多くいて、何人かがやったことにより、よい動きだと思った子が多かった。

<図8からのイメージと考察>

図8：5歳児場面⑥



お客様のようにきちんと正座して動きを止める。  
この動きから、じっとしている。  
静かに待っている、という気持ちが伝わる。  
しかし、「しーん」の動きを工夫したというより  
静かに待つ時の姿勢は、これだというイメージが  
持たれているようで、動きの工夫はされていない  
という感じを受ける。

<図9からのイメージと考察>

図9：5歳児場面⑦



上を向いて寝ているが顔は、横に向けている。  
足は大の字だが手は、身体の上にもって行き、こぶしを握っている。  
「しーん」と静まり返った中に警戒心が湧いて  
いるようだ。静かにするは、寝ることに繋がり、  
子どもは寝ている時が静かを演じる姿と結びつけ  
ている。

(2) 「しーん」に対する4歳児の動きイメージ

<図10からのイメージと考察>

図10：4歳児場面①



全て床にくっつけて、身体を丸める。仲間と身体をくっつけて固まって静かにしている。手を顔の下に入れ、足は、正座である。  
身体を石のように固く丸めることで、音を立てず  
待つ気持ちが現れている。静かにじっとしてい  
る。

<図11からのイメージと考察>

図11：4歳児場面②



身体を横にして、足を抱え込むような姿勢を取る。

横向きの姿勢をとり、周りの子の動きを観察しているようであった。

気持ちは、床に横たわることで次の動きをじっと待つことが大事と発言していた。

<図12からのイメージと考察>

図12：4歳児場面③

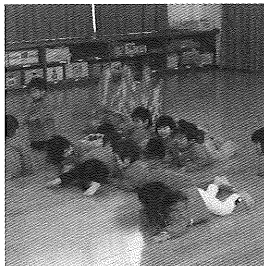


床に突っ伏した形で、お尻を少し上げてカエルが眠っているような姿勢を取る。顔面も床にくっつける。

ぺちゃんこになって見えないようにした。音が出ないように気をつけたらこの形になったと発言していた。

<図13からのイメージと考察>

図13：4歳児場面④

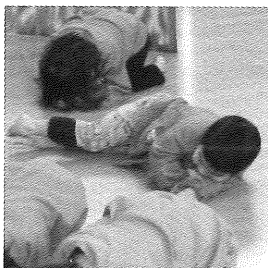


床に身体をべたっとくっつけ、伏せて寝転ぶ。足も手も伸ばした状態で静かにしている。

周りが静かになる気持ちを身体全体で表現し、じっとして動かない事が「しーん」とすることだと信じてこの動きをあらわした。

<図14からのイメージと考察>

図14：4歳児場面⑤



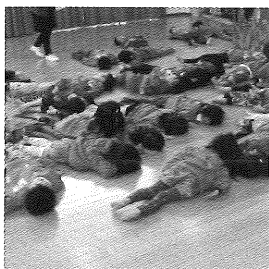
身体を横たえ、足先をそろえて寝転がる。

周りの子の動きに翻弄されず、自分なりの動きを考えてあらわしている。

静かに耳をすませながら、他の音を聞こうと構えたのである。

<図15からのイメージと考察>

図15：4歳児場面⑥



床に寝た姿勢をとる。おへそが下向きの子が多い。手は、顔の下に枕のようにかかっている。

すやすや眠るというイメージを持ち、静かなシーンを表している。

## 6. 総合考察

子どもたちは、それぞれの思いや考えを持って「しーん」というオノマトペを受け止めている。動きのイメージは、寝転ぶ・身体を丸める・大の字になって床に寝る・おへそを床にくっつけて伏せる・身体を横たえる・膝を両手で抱えて横になる等、身体を低くし寝る姿勢を基本にした動きを見せた。これらの動きをA群と位置づける。

A群の動きを表すきっかけとなった点は、絵本の画面の影響も大きいと思われる。黄色の表紙をめくると、一面ブルーの世界が広がっている。青を基

調にしたその画面から、「しーん」を受け止めた子どもの気持ちを聞くと、「しーん」と静まり返る情景が浮かび、音が全く聞こえない世界をイメージしたようである。静けさを自己の身体であらわすとき、“おしゃべりしない”、“動かない”ということが要求されると考えた子どもが多い。日常の体験と置き換えた時、寝るということがこれらの要素を一番タイムリーにあらわせる動きだと考えたのだと思われる。

また、V字バランスの姿勢や、背中を床にくっつけているが足は上に上げて動かさない姿勢、立ち姿勢で大腿で手は上にかざしストップポーズをとる等の動きをB群として考察を加える。B群では、考えて動きを工夫したが、動きを作り出すイメージはA群となんら変わらないことが子どもたちから伝わってきた。

保育者が意外だと感じた動きは、正座の姿勢やお山座りをしたことである。この動きをC群とする。C群のイメージの背景には、お話を聞く時の“静かにしている”というイメージがあったようだが、日常保育の中で、保育者が要求するお話を聞く時の姿勢である。静かに相手の話を聞く時繰り返しこの姿勢を体験してきた子どもたちは、静かであることなどのイメージを脳裏に湧かせた時、自然にこの姿勢を「しーん」という言葉に置き換えたのである。子どもが動きをあらわす時、背景に在る物は繰り返された日常の体験も使うことがC群の動きからわかった。

また、動きを止めることが静かにすることであるというイメージをもって、じっとしていたり、石ころのように固く身体を丸めたり、床に寝るという選択をした子どもが多かった。動かない、話さない、柔らかより固い方がよいと考えている。この動きをD群とする。D群では、「しーん」という言葉から静けさを感じた子どもは多いと考えられるが、固まる強度みたいなイメージをあらわす子どももいた。石のように固いとか、絶対に話をしないでギュッと口を閉じているとか、重いから動けないのような感覚をイメージとして出してきた子どももいた。

5歳児は、個々の子どもが自分の動きを考えて工夫することや動きを作り出す時の速度が速く、身体機能や思考の育ちを、言葉と動きを結びつけている様子があらわれていた。4歳児は、集団を意識し始めてきており、自己の創意工夫が前面に出るよりも友だちの動きを取り込んで、模倣して動きを作り出そうとする子どもも少なくない。しかし、同じように取り込んでもその子の速度や取り込み方運動能力の育ちの差異が似たような動きではあるが、その子らしさの動きにつながることもあることを発見できた。

## 7. おわりに

本研究は、身体表現の保育実践をする時に保育者が動きを引き出すために使っているオノマトペに注目した。オノマトペを保育者が使い動きと結び付ける時、適確な題材のイメージを湧かせたり、身体をリズムカルに動かしたりできる。そして、動くことが心を開放させ楽しいという心情の育ちを獲得していくのである。

オノマトペを保育者が使う時、動きそのものを適確にあらわして、余分な情報を付加しないため子どもは自己の動きを考えやすいと考えられる。

日頃、何気なく使って生活しているオノマトペであるが、たくさん言葉があることに気づく。今回は、絵本『もこもこもこ』を使って身体表現の遊び展開を実践したなかで、「しーん」という言葉を子どもがどのように受け止め、自己のイメージをわかせたのか。イメージをもとにしてどのような動きをあらわしたのかを探ってきた。

子どもは、その所属する集団の質やその日の自己の体調、気持ちの浮き沈みを敏感に動きとして表出してきた。受けとめる側の保育者にも動きへのイメージがあり、子どもと保育者のイメージがぴったり合うこともあれば、子どものあらわしを「なるほど」と納得できない時もある。保育者の思いをいつの間にか子どもに押し付けて保育していることに気づけない時もある。



しかし、本研究を通して、子どもがあらゆる動きの背景には様々な体験が生かされていることに気づいた。そして、「しーん」を投げかけられた子どもたちが真剣に動きと向き合い、真面目に考えて動きを発信しており、動きを工夫することや考えることで育つ内容があることがわかった。身体機能を十分に使って動くことだけを注視してきたが、本研究を通して、静の動きを子どもが作り出すプロセスに出会えた。

また、「しーん」を感じて動きを工夫している子どもから、静の動きをあらゆる子どもの感覚や自己制御をかけて、体位を維持して待つ様に繰り返し出会わせてもらうことができた。動かない動きをあらゆる子どもの姿に出会い、足や足首や手の動き、身体の向き、上下動、丸まり加減、動きから醸し出される雰囲気も感じて動きを考えている子どもたちの素敵な育ちに出会うことができた。

今後の課題として、オノマトペを感じてあらゆる子どもの動きを細かく取り上げ、動きイメージや子どもの思いを探ることで、身体表現の保育実践の有効性を検証し、学生や保育者に発信していくことを継続したいと考える。

注)

- (1) 平野仁美「身体表現の動きを引き出す言葉かけ—保育者と学生の言葉かけアンケートからの一考察—」大会論文集保育学会第61回大会
- (2) 舞踊の4つの要素とは、オノマトペ・空間・動き・イメージを示す。
- (3) 谷川俊太郎(2005年)『もこもここ』(文研出版) p 1
- (4) 「保育所保育指針(2008年4月1日告示)」第3章保育の内容と表現 p18
- (5) 「保育所保育指針(2008年4月1日告示)」第2章子どもの発達 2 発達過程 p 9 - p 11
- (6) 田守育啓(2006年)『オノマトペ・擬音・擬態語を楽しむ』(岩波書店) p v まえがきより引用

参考文献

- ・阿部初代（1985年）『音楽リズム幼児の身体表現—発達特性と指導法—』（清水印刷）
- ・西洋子他（2009年）『子ども・からだ・表現—豊かな保育内容のための理論と演習』（市村出版）
- ・西洋子他（2012年）『子どもの身体表現～からだどころ・あらわしてあそぼう～』（市村出版）
- ・青木理子他（2011年）『新訂豊かな感性を育む身体表現遊び』（ぎょうせい）
- ・田守育啓（2006年）『オノマトペ・擬音・擬態語を楽しむ』（岩波書店）
- ・麻生武（2002年）『身ぶりからことばへ』（新曜社）
- ・やまだようこ（2006年）『ことばの前のことば』（新曜社）
- ・尼ヶ崎彬（2002年）『ことばと身体』（勁草者）
- ・立川昭二（2000年）『からだことば』（早川書房）
- ・谷川俊太郎（2005年）『もこもこもこ』（文研出版）
- ・本永定正（1986年）『がちゃがちゃどどん』（福音館書店）
- ・ひろかわさえこ（2000年）『ぶちぶち』（アリス館）
- ・厚生労働省告示（2008年）『保育所保育指針』（フレーベル館）